ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

「子午線150km縦走旅行」を達成しチューリップの球根を植える生徒達

アルパック　ニュースレター　もくじ　1993年3月1日

●近くて遠い国・韓国の新都市開発事情…… 2

●プロポーザル方式による設計者選定…… 4

●網野町　子午線をひたすら歩く網野高校2年6組…… 6

●大阪近郊の小さな大企業…… 8

●中国旅行雑感……10

●住民参加のまちづくりを考える……11

●新刊旧刊書評紹介……13

●まちかど……14

NO.58

近くて遠い国・韓国の新都市開発事情

杉原　五郎

大阪から２時間の国・韓国

大阪の伊丹空港を朝10時に飛び立つと、12時にはソウルの金浦空港に到着する。韓国は、飛行機で行けば２時間ほどの近い国なのだが、私にとっては、地理的な距離以上に心理的には遠い国であった。

韓国は、いま、1988年に行われたオリンピックの成功をスプリングボードとして経済のめざましい発展を遂げ、大きく変ろうとしている。近くて遠い国・韓国でどのような都市建設が行われているのだろうか。そのような問題意識をもって、昨年11月韓国で行われた、日本・韓国・台湾３ケ国都市計画学会主催による大都市圏計画のワークショップに参加した。ここでは、ソウル、テジョン、プサンといった韓国の主要都市における新都市開発の最新事情についてリポートしてみたい。

ソウルの郊外、ブンダン新都市の開発

いま、ソウルの郊外には、５つの新都市開発（全体で4,925ha、約118万人）が進展している。このうちのひとつ、ブンダン新都市は、ソウルの郊外約25kmの位置にあり、開発面積1,894ha、計画人口39万人である。1989年に開発構想が発表されてからまだ４年ほどしか経過していないが、1992年中には入居者が10万人に達するという開発テンポである。今後都市高速道路や地下鉄の導入を想定しているとのことであるが、母都市ソウルとの交通をどのように確保するのだろうか、まずこの点が大いに気になった。全体に高層住宅主体で、グロスの人口密度が200人/haを越える（街区レベルでは600人/ha以上）という高密度開発についても、コミュニティなどの問題をどのように考えているのだろうか。韓国の都市計画関係者の話では、いま韓国では、住宅問題がたいへん深刻で、大統領は４年間で200万戸の住宅建設を公約にしており、量的充足の課題がまだまだ重要であるとのことであった。

大徳研究団地とテジョン市における都市開発

韓国のほぼ中央に位置し、ソウルから南方約170kmにあるテジョン（大田）市は、市域540km²、人口110万人ほどの都市であるが、ここでも新都市開発が活発に展開されていた。毎年全市人口の１割近い10万人の人口が増加しているという。テジョンは、旧市街地の鉄道駅を中心とした単一都市核の街で、交通体系も未整備であったが、将来（2001年）は、165万人の人口規模を目標とし、多核的な都市構造とするべく地下鉄の建設や道路体系の整備などを精力的に進めようとしている。

ブンダン新都市内の小学校、高層住宅群

ブンサン新都市で建設されつつある高層住宅群

こうしたテジョン市の郊外に、大徳研究団地の建設が進みつつある。この研究団地は、1973年にマスタープラン（開発面積2,700ha）が作成され、1978年から研究施設の移転が始められており、現在19の研究機関が立地し、9,000人の研究者が働いているとのことである。首都・ソウルの都市機能分散の一環として国の研究機関をソウルから移転させたこと、施設を集中配置していることなど、筑波研究学園都市と類似している。この研究団地の一角には、1993年開催予定の万博会場が鋭意整備されつつあり、韓国の国家戦略としての意気込みが強く感じられた。

この大徳研究団地に隣接して、ブンサン新都市の開発（870ha、22.8万人）が進められていた。ここの新都市開発も、ブンダン新都市と同様、ものすごい開発スピードと高い開発密度が特徴である。高層住宅が南面平行配置で百棟以上林立する様は、驚きである。開発にあたり、土地を全面買収し、先住民を別の土地に強制移転させているのだが、この点も用地買収がままならないわが国の現状とは大いに事情が異なっているようだ。

プサン（釜山）の海上新都市開発

プサンは、1941年に28万人であったのが、戦後急速な都市化により1991年には389万人（14倍）まで膨張した。韓国随一の港湾都市でもあるのだが、二次産業の衰退や都市基盤整備の遅れなどさまざまな都市問題を抱えているとのことである。

このプサンでは、国際的かつ国内的な都市戦略を踏まえて、都市問題の解決や都市機能の回復、21世紀型の港湾都市建設を目標に、海上新都市（852ha）の開発に取り組んでいる。1989年から2003年までの開発期間に総額1兆6,000億ウォン（約2,500億円）の巨費を投じるというプロジェクトである。ポートアイランドや六甲アイランドと同じように、水際線は国際コンテナふ頭として整備しながら、アンコの部分は住宅や商業・業務など都市的な機能の集積を図るというコンセプトとなっている。背後地が狭く、山裾にへばりつくようにして市街地が形成されているプサンでは、都市発展を海に求めるというのは、日本の大都市圏臨海部と同様、ごくあたりまえのように感じたが、どのような市民的討議がなされているのか、という点についてはプサン市関係者に聞きそびれてしまった。

韓国における新都市開発の特徴

ソウル、テジョン、プサンなど韓国の新都市開発の事情を、土地開発公社（日本で言えば住宅都市整備公団）の現地責任者や市役所の幹部、都市計画の研究者などから説明を受け、現地を見て廻ることにより、幾つか感ずるところがあった。

「新都市の規模が大きいこと」「建設のスピードが速いこと」「人口密度が高いこと」などが韓国の新都市開発に共通する特徴である。これらの諸点について日本の参加者から韓国側に鋭い質問が投げかけられたが、総じて韓国の都市計画関係者は事態を楽観視しているように見受けられた。「いま、韓国では、経済の成長を図っていかなければならない。そのためには大都市に人口が集中するのはやむを得ないことだ。したがって大都市には住宅の受け皿を大量にかつ大急ぎで用意する必要があるのだ」といった基本認識があり、「いま進めている新都市開発に問題が生じたら、その時に見直したらよい。また、成長しつつある韓国は見直す力を持っている。」というのがかれらの確信である。高度経済成長と急速な都市化の中で、さまざまな都市建設上の課題に直面してきた日本の経験からすると、本当にこれでいいのか、という思いが残

ったのは正直なところである。

韓国にはまだ地方自治の制度や住民参加のシステムなども整っていないと聞く。都市の基盤も整備されておらず、住宅の量的不足といった古い時代の都市問題を抱えながら、グローバル化や情報化の進展の中で、都市としてのグレードを引き上げたり、アメニティや環境重視の都市づくりを進めていかなければならない、といった現代的課題にも直面している。この点についてはわが国とよく似た状況にあると言えるが、韓国の場合には、わが国以上に急速度な経済発展と都市化を進める中でそのことをしゃにむにやりとげようとしているように感じる。それは、わが国が、欧米諸国にキャッチアップするため、明治以来100年余りの間、あたかも高速道路の追い越し車線を猛スピードでひた走ってきたこととイメージとしてだぶる。

東アジアとの国際交流の発展を

海外調査と国際交流には、3つの段階がある、というのが私の持論である。第1は、ともかく見て廻るという段階。第2は、一定の問題意識に基づいてヒヤリング等を行い、調査をするという段階。第3は、それぞれの国（都市）のバックグラウンドを理解した上で、共通の問題意識に基づいて共通の国際言語で自由に意見交換や国際交流を行う段階。

今回の韓国調査は、まだ第1の初歩的段階にあるが、世界の中での日本のポジショニングを踏まえつつ、東アジアの諸国との交流をさらに深めていければと考えている。

（大阪事務所　すぎはら　ごろう）

プロポーザル方式による設計者選定

石本　幸良

昨年、京都府市町村共済組合会館の建設の設計者選定における事務局のお手伝いをさせて頂きました。日頃はプロポーザルやコンペの提案側でしたが、今回は事務局でその経過をつぶさに体験することができましたので、その時感じたことなどをまとめてみます。

設計者選定までの経過

現在の共済会館は昭和31年に開設されましたが、施設の老朽化や施設内容が組合員の要求に合致しない状況となり、昭和50年代に土地取得を行い、これまで建設に向けて準備、基本構想の策定が行われていました。今回、建設に向けての条件がそろい、設計者の選定の段階を迎え、アルパックでその事務局のお手伝いをすることになりました。

プロポーザル方式の採用

これまでの準備段階での蓄積からすると、コンペ方式の採用も十分に可能な条件はそろっていました。組合事務局においては他都市の方式の調査、また、近年の設計者選定方式における問題点なども十分に調査をされており、設計者への過度の負担をかけない形での方式を選びたいとの意向からプロポーザル方式の採用を決定されました。今回のプロポーザルが通常ささやかれるような問題も生じることなくスムースに流れたのもこの事務局での準備とご理解の結果と感じています。

準備段階から提案まで

今回のプロポーザルはJIA の「プロポーザル方式実施のための指針」を参考に進めまし

た。全体スケジュールの設定、要綱の策定、提案者への配付資料の作成、選定委員会の準備などこの準備のために約3ヵ月ほどかけました。提案者への説明会から提案までも1ヵ月を確保して十分な応募期間も確保することができました。今回指針に沿った形での運営、無理のないスケジュールの設定もこれまでの準備段階の取組の精度が非常に高かった成果と思われます。

応募者の選定

応募者の選定についても公平、公正なプロセスを期して、3段階に分けて選定を行いました。第1段階で京都府内での設計実績を中心に約20社程度を候補とし、第2段階で今回の設計が可能な組織力の評価を行い、約10社程度とし、第3段階は事務局の提案に基づき組合の理事会で6社に選定しました。

選定委員会の構成

選定委員の構成については5名で、組合関係者が2名、学識経験者及び建築家2名、他都市の会館運営者1名とし、関係者以外の委員を過半数とすることで公平を期しました。

選定委員会における討議

選定の進め方については事務局で案を作成し、委員会会長の確認と委員の方の了解のもとに以下のように進めました。

まず応募案についての説明及び質疑を各社20分ずつ行い、その後討議による選定を行いました。第1段階で6案を半数程度にしぼりこみ、第2段階で残った案についての討議を行い、第3段階で最初に落ちた案を再確認を行い、最終討議で1案を決定しました。

応募者への報酬

応募者に対しては組合のご理解を頂き、1社20万円の報酬としました。JIA の標準値からすると下回る結果になりましたが、これまでの事例のほとんどが無報酬であったことと比較すると、今後行われるプロポーザル方式の良き事例となるものと期待しています。

以上が今回のプロポーザル方式の概略の経過です。組合の事務局及び私どもは過度すぎるほど「公平」ということにこだわり続け、多少ぎこちなさはあったように感じますが、無事設計者の選定が公平に行われたことを喜びと感じております。

プロポーザルを通して

今回設計者選定の事務局側を経験しましたが、このプロポーザルを通して感じたことをまとめてみます。

今回のプロポーザル方式は経過の中で度々書いておりますが、事務局での十分な準備と設計に対するご理解の成果と感じております。入札方式の問題からこのような競技方式が増加傾向にあると思われますが、要綱の不明快さや提出期間が短い、無報酬の事例が多く指摘されております。競技方式の採用を優先するあまり準備が不十分であったり、その審査の方法や体制が不十分なままに実施される傾向が強いように思われます。

一方提案者側にも多少とまどいがあったように思われます。今回、要綱策定においてはできるだけ提案者の負担軽減を図ることを目的に提出書類等も設定しました。設計趣旨の説明補足のためにイメージスケッチに止めることで負担軽減を図ったのですが、ヒアリング時に模型を持ち込もうした提案者もあり、結果として検討を重ねた要綱が、現時点での設計業界においては説明不足があったように思われます。今後、プロポーザル方式を設計者選定方式として確立していくためには設計者自身が過度の競争に走り過ぎる実態を認識し、競技方式への理解を高める必要があるように思われます。

もう一点私の感想になりますが、優秀案を

選定する上で提案内容により審査が行われるものですが、ヒアリングにおいての説明の印象もかなりウェイトが高く評価されると感じました。設計提案の内容がしっかりしていても表現が多少もの足りない提案もありました。しかし、その場合も設計者として誠実な説明には心の中で何とかこの案が決まってほしいと感じました。設計に対する思い入れがその説明者の人間性を通して出てくる印象を強く感じました。逆にあまりに流暢に誇示する説明を聞いていると、設計に対するその姿勢に疑問を感じることがありました。

今回プロポーザル方式の事務局側という貴重な経験をすることができました。今後、設計者選定においてプロポーザル方式の採用は増えてくるものと思われます。十分な準備を踏まえた公平な形での運営を望むとともに、これから提案者側として問題解決に取り組めればと考えています。

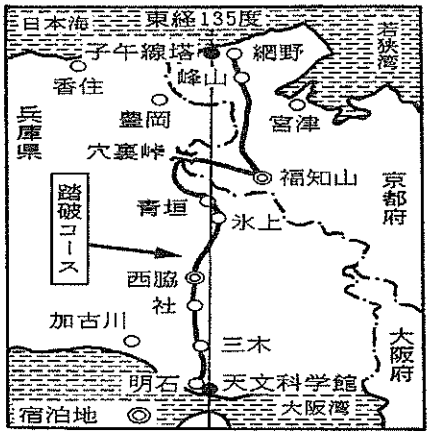
（京都事務所　いしもと　ゆきよし）

～泰さんのあんな京都こんな京都⑫～

網野町　子午線をひたすら歩く網野高校２年６組

山田　泰造

京都府北端日本海に面した丹後織物の主産地網野町（人口17,270人・面積 70.51ｋ㎡）と兵庫県明石市とを結ぶ線上を東経 135度が通過し、日本ではこの経線（子午線）を日本中央子午線と呼び、天体の方位角等を測る基準としています。府立網野高校２年６組44名（男子21名女子23名）はこの子午線沿いに平成４年10月22日～24日網野明石間 150㎞を踏破しました。今回は校長・教頭・担任の先生方のお話や生徒諸君の感想文をもとに報告します。



網野高校の生徒活動

同校は昭和52年からクラス別に研修的内容を持った２泊３日の修学旅行を実施しています。同時に学級活動・部活動に力を注ぎ、10年間の生徒と教員の努力により、相互信頼が深まり極めて良好な校風が醸成されました。平成元年には潮岬沖大島での野営自給自足の体験旅行、２年には実業団・大学・高中学校に使用済みのバレーボールの寄贈を願って、1600球を中南米等11カ国に贈呈し、３年日本ユネスコ協会から国際交流での立派なフェアプレーとして表彰を受け、４年は本旅行の実施と、注目に値する活動をしています。

子午線 150㎞縦走旅行　出発まで

夏休みに明石迄の縦走計画と、沿道の家々に町の花チューリップの球根１万個を配り、網野町明石間にフラワーロードを出現させようという計画をクラス全員で決めました。沿道の各種団体への協力要請、子午線沿いバス通過可能道路の選定、救急対策、トイレ対策、福知山迄60㎞の試験旅行、靴の選択と準備は

スタート地点（網野町子午線塔）

ゴールを目の前にして

順調に進みました。「当日が近づくにつれ周りの人の目が大きく感ぜられ、この目が大きくなればなるほど後に引けない気持ちになった」「計画当初、周りの反応はすごかった。『こんな過酷な道を歩ける筈がない』」と町中で評判となり、生徒達の緊張感が高まってきます。

ひたすら歩き続ける３日間

○前日10月21日　授業終了後町の北端にある子午線塔に集合し、次に町役場で町長に挨拶。町の木・松とメッセージを明石市長にと依頼され、網野駅迄約５㎞を歩く。子午線上を本州最北端から最南端までを完全踏破しようという生徒等の盛り上がる意欲です。

○第一日10月22日　５時網野駅集合。未明の空気は冷たく爽やか。全員快調に行進。福知山を過ぎ真っ暗な山道に入る。夜の寒さが加わり疲労が一時に出る。府県境穴裏峠に１時間遅れで８時到着。65㎞15時間を要す。福知山のホテルへバスで引き返し９時より入浴、夕食。

○第二日10月23日　穴裏峠に引き返し８時出発。前日の疲れが出て気息奄奄。氷上町成松保育園で園児に球根を贈り、園児の作ったお返しのネックレスを首にかけ元気を取り戻し歩き始める。目的地社町に２時間遅れで９時過ぎ到着。55㎞13時間を費やす。西脇に引き返し旅館10時過ぎに到着。入浴、夕食。

○第三日10月24日　社町出発７時30分。次第に皆の表情は暗くなり、話したり笑う者もなく、黙々として下を向いて歩き続ける。突然「明石　29㎞」の道路標識が目に入る。もう30㎞以内だ。あと少しだと途端に重苦しい空気が吹き飛ぶ。明石公園で小休止。服装、足の手入れを終え市立天文科学館に向かう。１時間遅れで33㎞８時間かけ、３時30分目的地にしっかりした足取りで整然と到着。出迎えの明石商業高校生や報道陣の拍手をうけ一瞬表情が緩む。地元高代表の歓迎の挨拶。新聞・ＴＶのカメラマンに二度三度促されてやっと数名が万歳をする。はしゃぐ者なし。小休止の後市役所東隣りの公園で松と球根を植え、４時30分疲れた表情で市役所に入る。市長に町長のメッセージを渡し、町長への市の花と木を受取り、夕食の後５時45分バスで帰途につき、９時30分家族に迎えられ無事到着。私はこの日一日、深い感動の渦の中で彼等を見守っていました。

体力の限界をのりこえて

「２日目・３日目とも口もきけない状態で泣き出しそうだった」「さっさとやめて楽になりたい。何度もバスに乗りたいと思った」だが「仲間が頑張っているのでそんな事はできない」「皆がやめないから僕はやめられなかった。そして僕のためにもやめなかった」と皆が支えあっていたからこそ、又あいつには負けられないというライバル意識や、地元の人々の目を意識して、自己の未来を賭けた

戦いに挑んでいたのです。

ゴールの瞬間「気が抜けてしまった様で、とにかく終わったという思いだけでした」「明石に着いたんだなあと思ったくらいだった」と飾る事もなく率直に気持ちを述べています。帰校後「何かをやり遂げる素晴らしさを知った」「20万歩の歩みは一生にわたり誇りとして残る」とゴールインには高揚した集団的な感動とはならず、時間がたつにつれて喜びが心に湧き、満足感で一杯となったのです。彼等は体力の限界に挑戦して立派に彼等なりの「青春の儀式」をなし遂げたのです。

「ただ歩くだけのこの旅行が何を意味していたのか今となってよく分かります。ヒトは本当に強く、思いやりの心は限りなく温かい。泣き出しそうに写っている写真。足にできた水ぶくれ。あの果てしなく長い道のりも愛しく感じるのです」なんという素晴らしい若者達でしょう。この感激を胸に彼達が故郷の発展の礎石となり柱となり、これからの網野のまちや、この地方のむらおこしに活躍する事を確信する次第です。

注）「　」内は、生徒の感想文集から抜粋させていただきました。

（京都事務所　やまだ　たいぞう）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

大阪近郊の小さな大企業

中塚　一

これまで企業の分類は、例えば資本金規模や従業員数、利益金額等で分類されてきた。しかし、資本金が50～100百万円程度の企業においても独自の技術開発や製品の差別化、営業戦略で、大企業の系列に属さず、対等に取引を行っている企業も存在する。

昨年、大阪近郊の中堅・中小企業数社に話を伺う機会があった。今回、その中で独自の企業戦略で発展を続けている中堅・中小企業－小さな大企業－数社を紹介するとともに、大都市近郊における製造業の動向、近年話題になっている大阪ベイエリア開発整備の基本的視点等について一顧します。

独自戦略により発展する中堅・中小企業

A社：資本金　　：約300百万円
　　従業員数　　：約650名
　　主な製造品目：各種精密歯車等

各種歯車からはじまり、現在、主にアクスルと呼ばれる車輌用前後輪駆動装置を製造している企業である。アクスルに関してはその精密性の高さから日本の自動車メーカーだけでなくフォードやＢＭＷ等からも受注している。

研究開発に関しては、これまで主に社内で製品化の段階で試行錯誤しながら行ってきたが、今後他の研究機関（大学等）との共同による基礎的、理論的研究を行い、トライアンドエラーをできるだけ少なくし合理化していくことが課題とのことであった。

また、今後の課題として、現在、歯車においてもミクロンクラスの精度を要求されており、社内的な技術者の人材育成が課題とのことであった。

Ｂ社：資本金　　：約700百万円
　　従業員数　　：約110名
　　主な製造品目：ホットスタンピング（純金箔を表面装飾印刷する機械）、パッドプリンティングマシン（三次曲線への印刷機械）等

家庭電気製品等にカラー転写等を加飾し、デザイン等で付加価値を付けるための機械を設計、製造、販売している（例えば、ゴルフボール、カセットテープ、テレビ、エアコン等の印刷が殆どこの企業の機械を用いている）。

研究開発に関しても、自社で殆ど行っており、大学、公的研究機関等へのチャンネルも独自に構築している（当該分野での技術面に関しては自社が世界的にもトップクラスであり大企業等からの技術移転はないとの声も聞かれた）。

C社：資本金　：約150百万円
　　従業員数　：約300名
　　主な製造品目：産業・農業用機械等

自社で開発、蓄積してきたポンプに関する技術を活かし、産業用、農業用ポンプ（防除機等）を自社ブランドで製造、販売している。

生産現場においても自動化を進めており自動倉庫を含めた完全ＦＡ（ファクトリーオートメーション）化を進めている。

中堅・中小企業からの声

今回、ヒヤリングを行った数社から、「大阪には中小企業は多く集積しているが、試作加工を依頼できる企業が少ない。」「同レベルで共同開発を行える技術レベルの高い中堅・中小企業が少ない。」「異業種交流会等にも参加しているが、技術交流、共同開発にまで発展しにくい。」等の声も聞かれた。

大阪近郊の製造業の動向

これまで紹介した企業のように、大阪近郊の中堅・中小企業が全て、大企業から自立化した企業であるとは言えず、まだまだ従来の大企業の下請け的な企業が大半であろう。しかし、従来の中小企業の範疇に納まらない企業も多数存在していると言える。

今後、都市近郊では、バブル経済が崩壊したとはいえ依然高値安定の状態にあり、地価負担力・付加価値力のない生産形態の企業や人材不足・後継者のいない企業（魅力のない職場環境）等は減少しているであろう。

しかし、都市近郊において今後、先端技術型・研究開発型企業を集積していく際には、例えば、東京都の大田区や多摩川流域（「ナショナルテクノポリス」と呼ばれている）等のように、それらを支える高難度加工や少量生産、短納期等のニーズに対応できる中堅・中小企業の集積とネットワークが必要であると言えよう。

大企業からの声

一方、大企業を取り巻く技術・生産環境も変化してきている。大企業は、これまで生産ラインを全て海外（東南アジア等）へ移転しコストダウンを図ってきたが、「大都市近郊においても研究開発機能だけでは、次世代を担う製品開発ができない。」等の認識と、新製品開発については研究開発と生産とが一体となり開発を行う必要性から、一部国内に生産ラインを再移転しているケースも出始めている。

リストラへの新たな視点

これらを、現在、大規模なリストラクチャリングが進められている大阪ベイエリアに即して考えてみると、周辺地域に立地している現在の中堅・中小企業の集積を活かし、それらの生産技術の高度化を図り、且つ、まとまった規模の新たな生産現場も確保することで、世界の研究開発・生産拠点として再生していくという視点も必要なのではないかと考えている。

（大阪事務所　なかつか　はじめ）

中国旅行雑感

小竹 暢隆

昨年末押し迫る頃、中国旅行を実現することができました。きっかけは、名古屋の大学に来ている中国人留学生、陳麗釗さん（小陳）の２年越しの誘いです。彼女は以前、当名古屋事務所でアルバイトをしていたこともあり、所内には隠れたファンもいるようです。小陳を入れて４人のメンバーで厦門（アモイ）（福建省）と上海を訪れました。

厦門めぐり

小陳の故郷でもある厦門は、現在は経済特区に指定されており、90年初の台湾プラスチック会長王永慶氏の工場建設発表で話題になったところでもあります。

厦門は観光地としてもなかなかのところです。集美旅遊區、南仏陀寺をはじめ、厦門大学も訪ねてみる価値があります。さらに鼓浪嶼（コロンス島）は観光の名所であり、菽庄花園、四十四橋、海闊天空石刻、鄭成功塑像など見るにこと欠きません。

厦門青年団の夕食会にも招待されましたが、青年団メンバーは何と台湾の実業家ばかりです。福建省は台湾と言葉や習慣が同じであることから、厦門などに台湾からの投資が多くなっており、「両岸経済圏」を形成しています。

今回の旅行に限らず発展途上の国々に行くと、大抵はホテルや一流のレストランで食事をすることが多いわけですが、日本人が通常行かない店に入るのも楽しみの一つです。厦門ではそうした店をいくつか体験できました。

小陳お薦めの、定員が10名ほどの大衆ラーメン屋（ほとんど屋台）は、狭いテーブルに相席で腰掛け「猪肺湯」を注文しました。一人前（大）が１元ですから約20円という信じられないような安さです。

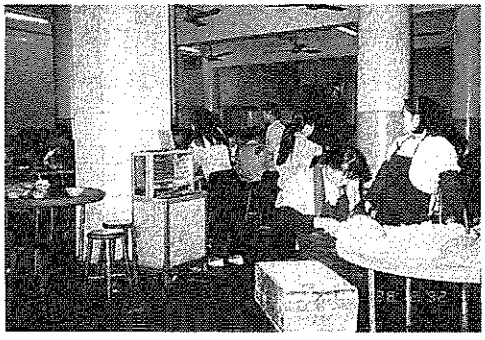
同じくお薦めの、「313」という所在地の地番をそのまま店の名前にしている大衆食堂があります。生鮮魚類専門の店で、店の前の水槽を見ながら、すなわち外で注文をするのです。中国は「食」の奥行きが非常に深いところです（飯好喰）。

上海めぐり

人口1,300万人を擁する中国最大の都市・上海は長江（揚子江）河口に位置し、中国全土の玄関口として海外との接点の役割を担い続けてきました。現在は北京、天津とならぶ中央直轄都市ですが、12の行政区（東京23区に相当）と９の行政県から成り立っています。

今、上海には巨大プロジェクトが進行しています。浦東地区と呼ばれるところで、上海行政区から黄浦江を渡ったすぐ東側に位置しています。350km²といいますから(行政区748km²の約半分)、名古屋市程度の大都市がもう一つできあがることになります。

中国は今高度成長期であり、その大部分を沿海地域で担っているわけです。1988年１月



大衆レストランの光景（厦門）

上海市内の一光景

に趙紫陽総書記（当時）によって提唱された「沿海地域経済発展戦略」は実質的に健在なようです。

上海では中山東路、玉仏寺、豫園などを散策しましたが、工業製品を集めた「上海展覧中心」では、思いのほか買物三昧をしてしまいました。

上海めぐりの案内役は「解放日報」副経理の馮長明氏です。馮氏は小陳の義父の友人ということですが、要職にあり大変多忙な方です。それにもかかわらず、丸々２日間お付き合いいただいたばかりでなく、出発日には早朝から空港まで送っていただきました。

雑感

中国は沿海部の発展地域をみる限り、凄まじい勢いで近代化が進んでいます。アジアＮＩＥＳにおいても首都を見る限り、国の先進性とは何かを考えさせられます。

けれども同時に、発展の歪みも顕在化してきています。社会資本整備が追いつかないことは言うに及びませんが、「環境」からのフィードバックが発展を減速させる方向に作用する可能性があります。ここでいう環境とはエコロジカルな意味はもとより、経済発展そのものがもたらす「車社会」といった社会経済環境のことでもあります。

こうした環境問題の先取りこそレイトカマーの特権ではないでしょうか。経済指標などしか評価基準のない社会、人々が物語を失ってしまったモノに溢れた社会、そうした社会

上海外灘地区　黄浦江ウォーターフロント

にならないような舵取りが必要ではないかと思います。

それにしても小陳の人的ネットワークには感心させられました。華人・華僑は地縁・血縁といいますが、それを可能にするのは人柄など個人的資質に拠るところが大きいと感じました。

（名古屋事務所　おだけ　のぶたか）

住民参加のまちづくりを考える

平岡　千佳子

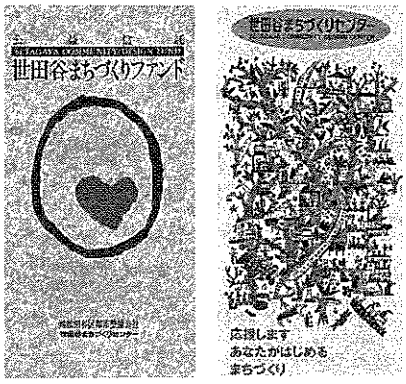
再開発の仕事に携わり、地元で種々の勉強会、見学会を開催します。事前にこういうことをすれば多くの人たちが集まってくれるのではと企画を進めていきます。中味だけではなく、いかにして多くの参加者を集めるかも課題です。いざ、当日になると集まったのはいつもと同じメンバーだったり、思うように人が集まらなかったりします。

「住民参加のまちづくり」が唱えられ、久しくなりました。１月30日に世田谷まちづくりセンター主催で「デザインゲームの実践例に学ぶ」という人が集まってまちづくりを進める新しい手法の講習会があり、参加してきました。

世田谷区のまちづくり

世田谷区は全国に先駆けて、独自の住民参加のまちづくりを進めています。

世田谷区では1987年に作成された「新基本計画」の中で住民を主体としたまちづくりの必要性を述べています。住民主体のまちづくりの具体的な形として1992年４月、「世田谷まちづくりセンター」が設置されました。まちづくりセンターは行政・企業・住民から独立した中立の立場で三者の考え方をつないでいく役割を果たします。まちづくり勉強会や



パンフレット

イベントの実施、国内外のまちづくり事例・情報の収集と提供などを行っています。また、自主的で公益的なまちづくり活動をする「まちづくり活動グループ」に対して財政的、技術的な支援もします。

資金援助の財源として1992年に「世田谷まちづくりファンド」が設立されました。住民・行政・企業の寄付金などから集められたお金を信託銀行により財産運用します。運用は片寄りが生じないように中立的な立場で構成された運営委員会が決めます。しかし、最近の景気低迷により区の出資金が縮小され、寄付を申し出ていた区内の企業も難色を示し、信託資金の目標額も下方修正されたと報道されています。

住民参加とはなにか？

「デザインゲーム」はノースカロライナ大学のヘンリーサノフ教授が考案した敷地計画や施設デザインをゲーム感覚で楽しく行いながら案にまとめていく手法です。世田谷区ではこの手法をもとにして、ワークショップ形式で住民参加の公園づくり、地域計画づくりなどを実践してきました。

講習に先立ち、この講習会に参加した理由、まちづくりの課題、参加者の職業、立場を聞く「旗上げアンケート」を行いました。参加者各々の机の上に置かれた1から5までの番号がついたプラカードを挙げて該当する回答番号で答えていきます。結果はすぐに集計され、板書し、参加者に伝えられました。

この方法は、情報の共有を可能にします。情報の共有は参加の意義を高めるのに大変有効です。現状の参加の方法といえば、記入式のアンケートに答えてもらう、説明会の実施など、行政側の一方的なものが多いのですが、世田谷区の試みのようにワークショップ形式で、住民も行政も対等な立場で自らの頭と足を使い、まちづくりを考える開かれた参加がとられるようになっています。

デザインゲームを進めてきたスタッフの方から次のような話がありました。

「ワークショップは結論を用意しているわけではない、参加者に結論を出してもらうために行っている。だから準備を怠らなければ失敗することは絶対ない」

アンケートはややもすると誘導尋問になってしまうことがあります。「参加者（住民）に結論を出してもらう」これがまさに「住民参加のまちづくり」と言えると思います。ただ参加者が集まらなければ失敗なので、参加を呼びかけるビデオを作って、回覧してもらったり、準備は念入りに行っているとのことでした。

今回の講習会はおもに世田谷区の実践例から新しい参加手法としてのデザインゲームの可能性を考えるものでした。「20年間、住民活動を続けてきたが何の成果も得られなかった。住民参加プラス専門知識で何か一つものにしたい」と自己紹介をした78歳になる女性の参加者がありました。住民の側からも方法論の側からもまちづくりは新しい段階を迎えていると感じました。

（東京事務所　ひらおか　ちかこ）

新刊旧刊書評紹介

森　まゆみ著

「小さな雑誌で町づくり」

晶文社（1991年）　　紹介：今村　麻子

小さな雑誌とは

この本を私が知ったのは、ある化粧品メーカーの夏のパンフレットであった。そのパンフの中に浴衣姿のモデルを背景にした谷中・根津・千駄木の魅力についてのコラムがあった。「ふーん、東京にもこんなところがあるんだ。」と思いつつ、筆者紹介を見ると、森まゆみ、主な著書のなかに「小さな雑誌でまちづくり」があった。

「小さな雑誌」とは、森まゆみさんら３人の若い母親が出している地域雑誌「谷中・根津・千駄木」（谷根千（やねせん））のことである。「地域雑誌」という名称には、ＰＲ誌めいたタウン誌と区別し、あくまで住民の立場に立つ、自主的出版物という意味が込められており、歴史・自然環境の保全と楽しい暮らしへの要求が発行の動機となっている。販売方法は、１冊350円（出版当初250円）のこの雑誌をまちの様々な店に置いてもらい、売れた分の８ガケで清算するという形が基本となっている。特集のテーマを見ると、「寒い日は、お風呂へいきましょう」「おいしい豆腐のかえる町」「私の原風景」「谷根千・底地買い『再開発』読本」「谷根千に生きた夭折の芸術家たち」「谷中七福神」などがあり、いま世になくて、求められている地域の情報がその内容となっている。

地域研究は、「谷根千」のようなものじゃないか

地域研究というのが、最近注目されているが、地域研究とは、やはり、自分の住んでいる場所を研究することではないだろうかと私は思う。たまたま谷中・根津・千駄木には、森まゆみさんのような方がいて、地域研究を「谷根千」というメディアを通じて人に届けている。おかげで、谷中・根津・千駄木には「私たちが生きてつくってきた町の歴史こそかけがえのないもの」という認識が浸透したという。「へぇーっ」とみんなが興味をもてる地域研究することにより、自分たち自身でこのまちをどうしていくかというようなことを提案していくことにつながっている。こんな地域研究を自治体が専門家の派遣などでバックアップしていくことが大切なんじゃないかと思う。

この本を手にして、しばらくしてから、森まゆみさんがパネラーとして参加しているシンポジウムを聞く機会があった。森まゆみさんの印象は、お母さんというより、目のくりくりしたかわいい人であった。内容は、本に書かれてあったことが中心だったが、とにかく目の覚めるような講演であった。実は、まだ「谷根千」の雑誌を読んだことはない。郵送を申し込んでもよいのだけれど、是非、谷中・根津・千駄木あたりをぶらついて、どこかの店先にある「谷根千」を買いたいと思う。

（京都事務所　いまむら　あさこ）

まちかど

空が見える錦小路

島津　史子

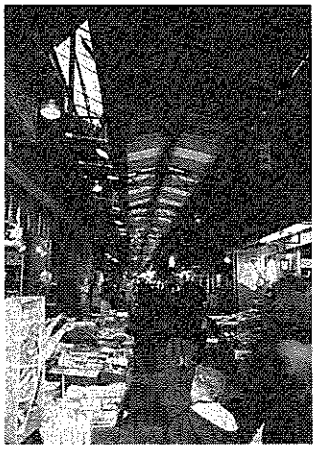
私が知っている錦市場というと、赤・緑・白（クリーム色）のアーケードでしっかりと覆われ、薄暗い中、店ごとに豆電球が品々を照らしているので、「暗いトンネル市場」と表現できると思います。

今、アーケードが徐々に新しく生まれ変わりかけています。なんと空が見えるのです。トンネルに空気穴ができ、明かりが差し込んでいるのです。これにより、豆電球の存在が薄れてしまっているのではないでしょうか？今までに、気にも止まらなかった店ごとの小さな屋根が、はっきりと映しだされ違和感を持ちます。

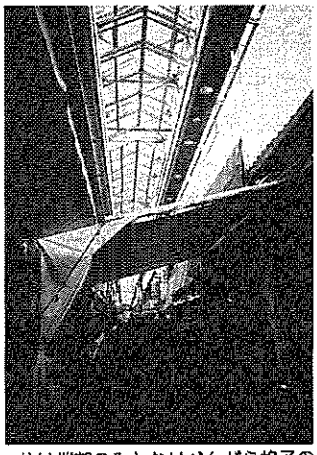
今後、これをきっかけとし、次第に個々の店自体が明るさに調和するようきれいになり、「スーパーマーケット錦」という名に変えてしまうまで変化していったりしないかなぁ？と思います。できれば、トンネル市場のままでいてほしいような・・・。

皆さんはどう思いますか。

（京都事務所　しまず　ふみこ）



道幅 3.2mだが建築基準法の除外規定で改築が実現した



柱は端部のみとなりべんがら格子のアーチがつく予定

6月に竣工予定

アルパック　㈱地域計画建築研究所

ARCHITECTS. REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES. KYOTO

本社 京都事務所	〒600 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 （大和銀行京都ビル6階）	TEL FAX	(075)221－5132㈹ (075)256－1764
大阪事務所	〒540 大阪市中央区城見1－4－70 （住友生命OBPプラザビル15階）	TEL FAX	(06) 942－5732㈹ (06) 941－7478
名古屋事務所	〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 （ツボウチビル2階）	TEL FAX	(052)962－1224㈹ (052)962－1225
東京事務所	〒160 東京都新宿区新宿2－5－16 （霞ビル401号）	TEL FAX	(03)3226－9130㈹ (03)3226－9560
㈱九州地域計画研究所	〒810 福岡市中央区天神1丁目15番1号 （日之出ビル6階）	TEL FAX	(092)731－7671㈹ (092)731－7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540 大阪市中央区谷町1丁目5番7号 （ストークビル天満橋10階）	TEL FAX	(06) 943－7016 (06) 943－7026
㈱都市居住文化研究所	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 （朝陽ビル4階）	TEL FAX	(075)252－2231 (075)252－4417